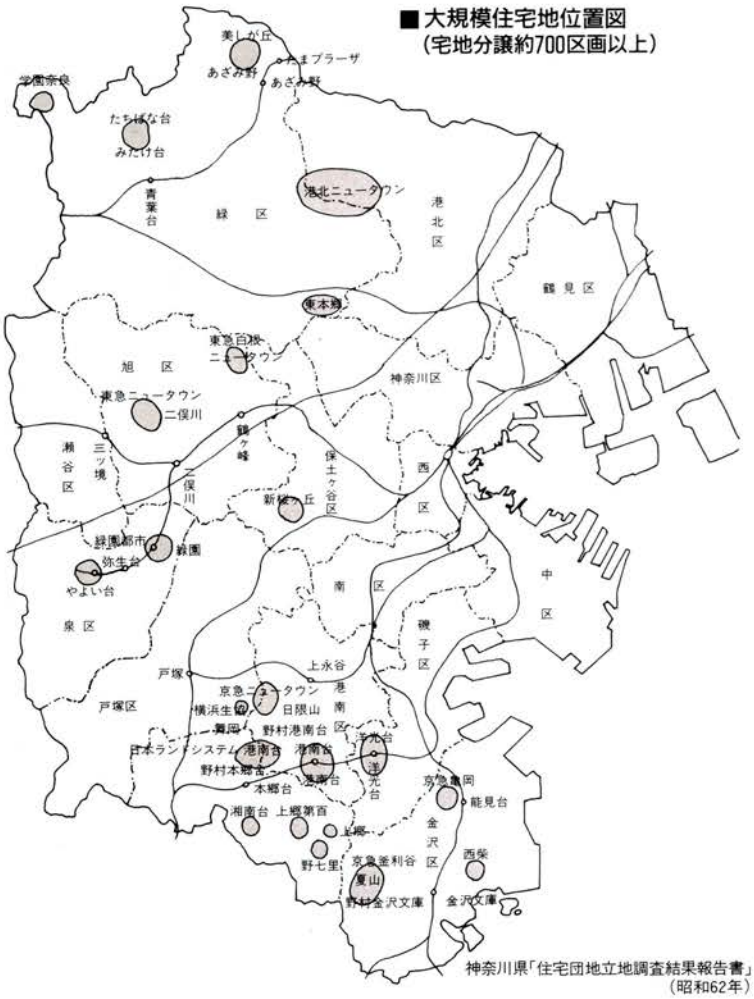
第1節　移り変わるまち

新しいライフスタイルを生み出す郊外住宅地

今、郊外部は新しい文化の発信地として注目されている

■大規模住宅地位置図
（宅地分譲約700区画以上）



神奈川県「住宅団地立地調査結果報告書」
（昭和62年）

横浜の郊外部は、昭和30～40年代に急速に開発が進んだが、40年代に多くつくられた戸建て中心の住宅地では、人びとの定住志向も強く、定着率も高かった。その人びとが住み始めてから20年ほどたち、さまざまな活動が、PTAや町内会活動の枠をこえて、あらわれてきている。

希薄になる近隣関係を補完するかのように出されるミニコミ紙、自分たちで企画し運営するミニコンサート、それぞれの人の趣味や特技を生かした地域でのさまざまな活動。それらは〝昼間市民〟である主婦だけでなく、今まで〝夜間市民〟でしかなかった男性層までまきこもうとしている。

またそれらは、一種のライフスタイルとして、従来よばれていたコミュニティ活動という枠をこえて、広がりを見せつつある。

いっぽう、郊外住宅地での生活ははなやかなイメージで語られることも多い。

いわゆるファミリーレストランではなく、高級イメージを売るレストラン・喫茶店に行く。主婦達は日中、カルチャーセンターやスポーツクラブにかよう。買いものは車で、広い駐車場をもつショッピングセンターに行く、などなどである。これらもまた新しいライフスタイルとして、さかんにとりあげられている。

新しいライフスタイルを次つぎに生み出している郊外住宅地は、地価高騰などさまざまな問題をかかえながらどう変わって行くのだろうか。